

群 教 セ	G02 - 02
	平 28. 261 集
	社会-小

社会的事象の特色や相互の関連を 考えることができる児童の育成

—自分と社会とをつなげる資料から考える活動を通して—

特別研修員 有賀 喜紀

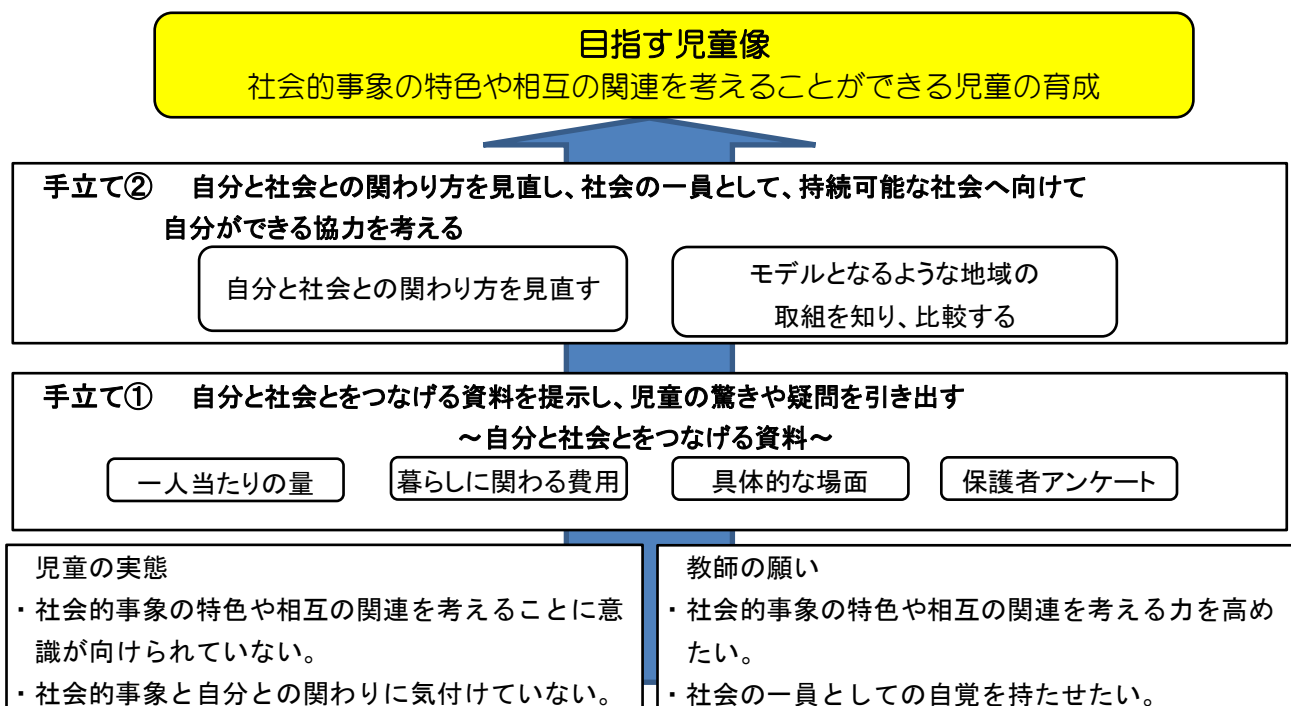
I 研究テーマ設定の理由

小学校学習指導要領解説社会編、第3学年及び第4学年の目標と内容の中で、「地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力」を育てることについて、自分たちの住んでいる市と県内の他地域との比較などによって人々の生活の特色について考える力や、地域の人々の生活と自然環境、伝統や文化などとの関連、願いを実現していく地域の人々の工夫や努力、協力と生活環境の維持と向上との関連、地域の人々の生活や産業と国内の他地域や外国との結び付きなどについて考える力を育てるようになっていることとしており、自分たちの住んでいる地域を中心に、他地域と比較して考える力を育てることが求められている。また、はばたく群馬の指導プランでは、伸ばしたい資質・能力として「比較・関連付けて考え、社会的事象の特色や意味を理解すること」を挙げており、社会的事象の特色について知識として学ぶだけでなく、比較し相互の関連を考えることが求められている。

本学級の児童は、生活経験の中から獲得した知識や、資料を見て気付いたこと分かったことを事実として理解することができる。しかし、社会的事象の関連に目を向け、そのつながりを考えることは苦手としており、どのように思考を促すか指導する側としては難しさを感じている。このような姿が見られるのは、児童が社会的事象を自分のこととして捉えておらず、一つ一つの事象が自分とつながっていることを意識していないためだと考えた。そこで、児童と社会とをつなげる資料を提示し、驚きや疑問を引き出して社会的事象を自分のこととして捉えることができるようにすることで、意欲的にその特色や相互の関連を考えることができるようになると考え、本研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

社会的事象を自分のこととして捉え、必要感を持って、社会的事象の特色や相互の関連を考えるために二つの手立てを講じた。

手立て1

自分と社会とをつなげる資料を提示し、児童の驚きや疑問を引き出す。

手立て2

自分と社会との関わりを見直し、社会の一員として、持続可能な社会へ向けて自分ができる協力を考える。

手立て1では、社会と自分とをつなげる資料として、例えば、児童が生活の中で社会的事象と具体的に関わっている場面、一人一日当たりの「消費量」や「使用量」といった児童にとって捉えやすい量、暮らしに関わる費用、保護者アンケートなどが考えられる。実践例では有料指定ごみ袋の有無や価格差を重点資料として取り上げる。資料を通して、社会的事象と児童の生活とがつながり、自分のこととして「なぜ違いがあるのか」といった驚きや疑問を生じさせる。自分のこととして社会的事象を捉えさせ、予想外の実事への驚きや不平等感から生じる疑問を持たせることで、児童の課題追究の意欲を高め、様々な資料に目を向け、社会的事象の特色や相互の関連を考えられるようにした。

手立て2では、社会と自分とがどのように関わっているのかを見つめる。まずここでは、自分たちの生活を振り返るとともに、保護者アンケートの結果を活用し、生活と社会とが深く関わっていることや、家族の中で誰が中心となって関わっているのかを考えていく。次に、社会的にモデルとなる他地域の関わり方と自分たちの関わり方とを比較し、共通点や相違点を明らかにしていくことで、自分と社会との関わり方についてもう一度見直す。比較することを通して自分たちの住んでいる地域や他地域の特色に気付くことができる。また、なぜ違いがあるのかを追究する中で、社会的事象の相互の関連を考える。最後に、社会の一員として持続可能な社会へ向けて自分ができる協力を考える活動を行うことで、社会の一員としての自覚を持つことにつながっていった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 自分と社会とをつなげる資料として、有料指定ごみ袋の有無や価格差を考える資料を提示したことで、社会的事象を自分のこととして捉えることにつながった。他地域との違いを知ることで、児童に驚きや疑問が生まれた。
- 他地域との違いを比較していくことで、地域の特性や人々の暮らし方の違いに気づき、社会的事象の特色や相互の関係を考えた意見を出すことができた。
- 自分と社会との関わり方について、社会的にモデルとなる他地域の関わり方を取り上げ比較したことで、自分と社会との関わり方を見直し、社会の一員として、よりよい社会に向けて自分ができることを考えることにつながった。

2 課題

- 自分と社会とをつなげる資料を数多く取り入れたため、一時間の授業の中で扱う情報量が増えてしまい、情報を処理するのに手間取る児童が見られた。どのような資料が児童と社会とを結びつけるのに有効であるのかを精査し、児童の発達段階に応じた情報量を与える必要があると感じた。
- 複数の事象の中で、何と何とが関連しているのかを、一人では十分につかめない様子が見られた。個人で考える際に、観点を絞って資料を読み取らせることが必要であると感じた。

実践例

1 単元名 「ごみのしよりと利用」 (第4学年・2学期)

2 本単元について

本単元は、学習指導要領第3学年及び4学年の内容の(3)ア「飲料水、電気、ガスの確保や廃棄物の処理と自分たちの生活や産業とのかかわり」イ「これらの対策や事業は計画的、協力的に進められていること」に基づいて設定している。廃棄物の処理に関わる対策や事業を取り上げ、廃棄物を衛生的に処理するためのしくみを調べ、地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを理解させるとともに、持続可能な社会に向けて自分たちが協力していくことを考えさせることを通して、地域社会の一員としての自覚を持たせたい。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	ごみの処理に関わる対策や事業は、地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを理解し、地域社会の一員として持続可能な社会に向けて自分ができることを考え協力しようとしている。	
評価 規 準	社会的事象への 関心・意欲・態度	ごみの処理に関わる対策や事業について、関心を持って調べ、持続可能な社会に向けて地域社会の一員として協力しようとする。
	社会的な思考・ 判断・表現	ごみの処理に関わる対策や事業について、見学・調査したことを基に、これらの対策や事業は地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを思考・判断し表現している。
	観察・資料活用の 技能	ごみの処理に関わる対策や事業を見学・調査したり、具体的な資料を活用したりして、必要な情報を読み取っている。
	社会的事象につ いての知識・理解	ごみの処理に関わる対策や事業は、地域の人々の健康な生活環境の維持と向上に役立っていることを理解している。
過程	時間	主な学習活動
課題把握	第1時	・家庭から出されるごみにはどのような物があるか話し合い、家庭でのごみの処理について振り返る。
	第2時	・学校のごみ置き場の様子を調べ、ごみの分別の仕方やごみを出すときの決まりに気付き、単元を貫く学習問題を設定する。
課題 追究	第3時	・清掃センターではどんなことをしているのかを予想し、見学の計画をたてる。
	第4 ～5時	・清掃センターの見学を通して、ごみの処理の仕方を調べる。
	第6時	・見学を通して分かったことを分類する。
	第7時	・見学のまとめを発表し合い、清掃センターの働きやそれに関わる課題に気付く。
	第8時	・ごみ処理に関わる課題を解決するには、自分たちも協力していくことが大切だと気付く。
	第9時	・ごみを減らすための家庭・学校・地域の取組について調べる。
	第10時	・ごみを減らすための自分ができることを考え発表し合う。
まとめ	第11時	・学習してきたことをもとに、学習問題に対する考えを自分の言葉でまとめる。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全11時間計画の第8時に当たる。これまでに児童は、家庭から出されるごみについて話し合い、ごみが適切に処理されることで健康な生活や良好な生活環境が維持されていることや、清掃センターの見学を通して、ごみの処理の仕方や町が抱えるごみ処理に関わる課題について学習してきた。

本時では、自分たちの町が抱えるごみ処理に関わる課題「ごみ処理にかかる費用の増加や最終処分場の容量不足」を取り上げ、今後も良好な生活環境を維持していくためにはどうすればよいのかについて、有

料指定ごみ袋の有無や価格差、一人一日当たりのごみの排出量、ごみのリサイクル率との関連を考えることを通して、地域社会の一員として自分たちが協力しようとする必要があることを理解させたい。

手立て1

周辺地域の有料指定ごみ袋の有無や価格の違いに気付かせる資料を提示し、驚きや疑問を引き出し、一人一日当たりのごみの排出量、リサイクル率の資料との関連を考える。

手立て2

10年後の町が今と同じように良好な生活をおくるために、自分ができることを考える。

4 授業の実際

導入で町が抱えるごみ処理に関する課題について振り返り、学習課題「10年後の町でも、今と同じような暮らしをしていくにはどうしたらいいだろう」を提示した。町の有料指定ごみ袋の実物を提示するとともに、中心資料として周辺地域の有料指定ごみ袋の使用の有無と価格差を取り上げた。

(1) 有料指定ごみ袋の有無や価格、一人一日当たりのごみの排出量、リサイクル率の資料の提示

まず、町と周辺地域の有料指定ごみ袋の有無と価格差を提示した。町で使用しているごみ袋が周辺地域と比べて倍以上の価格であること、指定ごみ袋がない地域があることを知り、児童は不公平感や疑問を口にした。次に「周辺地域の中でごみの排出量が少ないのはどこだろう」と発問したところ、児童は「指定ごみ袋のない地域である」と発言した。児童の多くは「ごみをあまり捨てないから、ごみ袋がいらぬ」「私たちの町はごみの量が多い」と予想した。そこで、町の一人一日当たりのごみの排出量が周辺地域よりも少ないという事実を資料から読み取らせて、驚きと疑問を引き出した。その原因を追究していく中で図1のような発言が見られた。S2、S6児の発言からは、ごみ袋の価格が高いから、ごみを減らす努力や工夫をしているのだと予想したことが読み取れる。また、S5児の発言からは、商店の少ない町の様子とごみの排出量が少ない事実との関連を考えたものとする。

T : どうしてごみ袋の価格が高いのに、ごみの排出量が少ないのだろう。
S1 : 家で燃やしている。
T : 家でごみを燃やしてはいけないんだよ。
S2 : ごみ袋が高いから、ごみを捨てないようにしている。
T : ごみを捨てないってことは、家にごみをずっと置いておくの。
S3 : ちがう、ごみをぎゅうぎゅうにして捨てている。
S4 : 私の家もそう。私もよくごみ袋のごみを踏んでる。
S5 : 町はお店が少ないから。
S6 : ごみを出さないように工夫している。

図1 ごみ袋の価格が高いのに、ごみの量が少ない理由の話合いの様子

次に、一人一日当たりのごみの排出量が県内で一番少なく、リサイクル率が一番高いA町のごみ袋の価格を予想したところ、多くの児童が「自分の町よりも高い」と考えた。また、「ごみの排出量が少ないから、ごみ袋の価格は安い」と予想する児童もいた。そこで、一人一日当たりのごみの排出量が県内で二番目に少なく、リサイクル率が二番目に高い町のごみ袋の価格が70円であることを紹介したところ、全ての児童がA町のごみ袋の価格は自分たちの町よりも高いと考え、一袋がだいたい100円くらいではないかと予想した。この様な予想を立てた後でA町のごみ袋の価格が20円であることを資料で提示すると、「なぜA町では、ごみ袋の値段が安いのに、ごみの量が少ないのだろう」と、児童は大きな驚きと疑問を持った。そして、この疑問を追究する中で、児童は自分たちの町とA町とのリサイクル率の違いに目を向け、「ほとんどリサイクルしているからごみの量が少ないんだ」と、ごみの排出量が少ないのは、リサイクル率が高いことが理由ではないかと考えた。

(2) 10年後の町が今と同じように良好な生活をおくるために、自分ができることを考える活動

本時の学習課題「10年後の町でも、今と同じような暮らしをしていくにはどうしたらいいだろう」を提示した導入の段階での意見と授業のまとめでの意見や記述を比較すると、導入の段階での考えにも、「リサイクルをする」「レジ袋をもらわずにエコバックを使う」「ごみの量を減らす」など、様々な考えが出されたが、それらを誰がするのかという主語が書かれたものは一つもなく、地域社会の一員として自分もごみの減量化に協力する当事者であることを意識することができていなかった。

有料指定ごみ袋の有無や価格差と、一人一日当たりのごみの排出量、リサイクル率との関連を考える活動の中で、町の有料指定ごみ袋の価格が高いにも関わらず、ごみの排出量が少ない理由について話し合った。事前に児童へ行った「ごみの出し方」のアンケートから、児童はごみを分別して捨てる意識が低いことや、普段からお手伝いとしてごみ捨てに協力している児童が少ないという実態が分かった。そこで、保護者アンケートから得られた「各家庭でのごみの減量化の工夫や努力」を紹介し、それについて「誰がその工夫や努力を行っているのか」を確認した。これは生活経験を振り返り、自分も協力していることがあると気付いたり、家では児童が気付いていない工夫や努力があったことに着目したりすることにつながった。

有料指定ごみ袋の価格が低いのに、ごみの排出量が低いA町を紹介し、その理由について考えた。その理由をリサイクル率の高さに着目した児童は、なぜリサイクル率が高いのかを考えた。話し合いの中で、図2の下線部のような発言があった。これは児童がリサイクル率が高い理由として、地域住民がみんなで協力していることに気が付いた場面である。話し合いを通して、児童は、ごみを減らすためには地域住民全員の協力が必要だと理解した。

授業のまとめでは、本時の学習課題である「10年後の町でも、今と同じような暮らしをしていくにはどうしたらいいだろう」について、自分の考えを書いた。導入の段階では「ごみをなるべく減らす」という抽象的な内容が書かれていたが、授業のまとめの記述では、図3のように、80%の児童が「自分たち」「家族全員」「みんな」といった誰が関わるのかを明確にした記述になった。また、導入の段階の記述よりも何をするのかが具体的になった。児童の15%は「A町のように」と、リサイクル率の高い町をモデルに考えることができ、地域社会の一員として自分もごみの減量化に協力することが大切であると理解したことを書いていた。

T : どうしてA町のリサイクル率が高いのだろう。
 S1 : リサイクルできる物をなるべく使っているからだと思います。
 T : 誰が使っているの？
 S2 : お母さん。
 S3 : お母さんだけではなく、他の人も。
 T : 他の人って誰？
 S4 : 小学生や子ども、お父さんも。
 S5 : 細かく分別してリサイクルしているから。
 T : 私たちの町でも分別してリサイクルしているよ。
 S6 : 町の人全員が協力している。
 S5 : A町の人は、分別する習慣がついているんだ。

図2 A町のリサイクル率が高い理由についての話し合いの様子

【導入の段階での記述】

ごみをなるべく減らす。

【まとめの記述】

お父さんやお母さんだけではなく、自分たちも協力して、分別してリサイクルに協力する。リサイクルできるものをなるべく使う。

図3 ごみ処理に対する児童の考えの変容

5 考察

手立て1において、自分と社会とをつなげる資料を提示することで、社会的事象と自分たちとの生活とを結び付け、自分のこととして捉えたことによって、驚きや疑問が出された。そのため、高い興味関心をもってその疑問を追究することができ、社会的事象の特色や相互の関連に目を向けることにつながった。

手立て2において、自分と社会との関わり方を見直すために、保護者アンケートを活用し、社会的事象と生活とがどのように関わっているのかを考えた。また、それは主に誰が中心となって関わっているのかを明らかにすることや、自分と社会の関わり方とモデルとなる関わり方とを比較することにより、社会的事象の特色や相互の関連を考え、社会の一員として、持続可能な社会へ向けて自分ができる協力を考えることができた。

一方で、自分と社会とをつなげるための資料を数多く提示することで、授業の中で扱う情報量が増えてしまった。また、複数の事象がどのように関連しているのかを、一人ではつかめない様子も見られた。観点を絞って資料を読み取らせたり、提示する資料の順番や量について精査したりする事が大切になると感じた。